

だれもが生まれてきてよかったと思える「くまもと」をめざして。

熊本県人権センター情報誌



VOL.15  
2008.3月号

熊本県人権センター

# ココロ通信

今回の  
テーマ

## 自分らしく輝くために

～一人ひとりの違いや個性とは～

人は皆、自分の能力や個性を生かし、自分らしくありたいと願っています。

でも、すべての人の能力や努力は尊重されているでしょうか？

今でも社会には、性別、病気や障がいの有無、

出身地等による偏見や差別意識があり、

夢や希望の妨げになることがあります。

誰もがいきいきと暮らす社会をつくるため、

一人ひとりの違いを認め、個性を尊重するということが、

私たちに求められています。



旅立ちの季節に、“違い”や“個性”とは何かについて、

考えてみませんか。



今号には、さまざまな困難を乗り越え、活躍する2人のお話を掲載しています。

※2～3ページの「人権インタビュー」、6ページの「講演会レポート」をご覧ください。

もくじ

●自分らしく輝くために……………1

●人権インタビュー……………2～3  
大村詠一さん(エアロビック選手)

●シリーズ「人権課題について考えてみよう!」

⑩さまざまな人権課題……………4～5

●講演会レポート……………6

鈴木ひとみさん(エッセイスト・  
バリアフリーコンサルタント)

●人権メッセージの紹介……………7

●人権センターからのお知らせ……………8



# 病気への理解を通じて考える “個性の尊重”

おおむら えい い ち

## 大村 詠一 さん

エアロビック選手

1型糖尿病の治療を続けながら、エアロビックという激しい競技の世界で、数々の輝かしい成績をおさめてきた大村詠一さん。各地で、病気に対する理解を深めるための講演会などの活動も行っています。今回は、病気とエアロビック競技を通じて得た多くの出会いと、それらから生まれる、“個性”という考え方等について語っていただきました。



### ● 8歳での発病

爽やかな笑顔が印象的な大村さんは、競技エアロビックの世界で、ワールドカップでの2連覇を含め、日本のみならず世界でも活躍する実力者です。この春にはドイツでの世界大会への出場も予定されています。毎日2～3時間、多い日は8時間くらい練習するというハードな日々をずっと送っています。しかし、そうした競技者としての活躍の裏には病気との闘いがありました。

大村さんは4歳の時、インストラクターを務める母親の勧めでエアロビクスを始めました。最初は「お遊戯」程度の感覚だったそうです。そして8歳の誕生日の翌日のことでした。夜中、トイレに何度も行き、そのたびに水をガブガブ飲むといった症状があったため、病院へ行き検査を受けたところ、1型糖尿病であることがわかりました。

「病気になったことが分かったころは、まだ小さかったこともあり、知らない病気にかかった恐怖心と『なぜ自分だけ』という思いで、病気だということを受け入れることができませんでした。」

小学校での生活は、いろいろと辛いことがあったそうです。糖尿病は一日に何度かインスリン注射をしなくてはならず、学校でもその必要がありました。すると、周りからは「なんで注射打つの？」と聞かれたそうです。また、体育の時間等に低血糖で倒れないように、ジュースやアメで糖分補給をすると「なんで、詠一くんだけアメ舐めていいの？」と言われ、これがとても辛かったそう

です。「病気について、人に話すのが嫌でした。それに、自分も病気のことをよく理解していなかったので、人から聞かれてもうまく答えることができなかつたんです。」

### ● 悩みから救ってくれた紙芝居

そんな学校生活での悩みから救ってくれたのは、小学校5年生の時の担任の先生との出会いでした。先生は糖尿病についての紙芝居をクラスみんなで作ることを提案してくれたそうです。クラスメイトが一人一枚を担当し、本を読んで、糖尿病の勉強をしながら、紙芝居を作りました。完成すると、全校生徒にも病気を知ってもらえるよう、クラスメイトが紙芝居を持って他の学年を回りました。そのおかげで、学校での生活がしやすくなったと言います。

「みんなに知ってもらうことで、学校生活が過ごしやすくなりました。それまでは、いろいろと説明しないと理解してもらえないという状態でしたが、ある程度病気についての知識を持ってもらえたことで、自分からも病気のことを言えるようになりました。そして、気持ちが軽くなった分、『病気は嫌なもの』から『そうでもないな』と考え方が変わりました。」

病気についての周囲の理解を進め、悩んでいた大村さんの力となったこの紙芝居は、今でも先生が大切に保管していて、当時の大村さんと同じように悩んでいる子どもたちのために、いろいろな場所で活躍しているそうです。

## ●病気も個性の一つ

小学5年生になると競技スポーツとしてのエアロビックに転向し、競技に本格的に打ち込むようになり、中学1年生の時には、全国大会への出場を果たします。その頃、心の中でも変化がありました。

「病気に対しての考え方が一番変わったのは、中学生の時かな」と、大村さんは振り返ります。中学生になって、福岡にある病院に通院をするようになったことで、糖尿病の方と関わる機会が増えたことが、その理由の一つにあります。「その時に感じたことは、病気なのは、自分だけじゃないんだということです。」

またその頃、いろいろなイベントを通じて、多くの糖尿病の方やその他の病気の方にも会う機会が増え、さらに、エアロビックの競技でも、全国大会にも出場するようになったことで、自分よりもずっと年上の選手と出会う機会も増えてきたそうです。「たくさんの人たちと出会い、会話し、いろんな話を聞くことで、自分の考え方に幅が広がったと思います。そのことで、糖尿病に対する自分の考え方も変わりましたね。」



そうした変化の中で、『病気も個性』だという思いに至ったそうです。「最初の頃は強がりと言っている部分もありましたけどね。今では、注射を打っていると『大村君?』と声をかけていただいたりすることもあるって、病気は自分の個性だと本当に思いますね。」と笑顔で語る大村さん。「今の自分があるのは、もちろん、家族の支えがあったからですが、『病気』と『エアロビック』をきっかけに講演会にも呼んでもらったりして、他の人の数倍は人と出会い、関わる事ができたおかげだと思っています。」

ところで、競技者である大村さんには、エアロビックを通して伝えたいことがあると言います。「僕は、病気でもこんなに踊れるんだということを証明したいと、中学生の時からずっとやってきました。病気になってもできることは、いっぱいあると思います。そのことを人に伝えていきたいし、僕が踊っている姿を見て、『自分もがんばれるんだ』と思ってくれば、幸せなことです。そして、糖尿病についての理解が深まればと思います。エアロビックが、自分のためにも、人のためにもなるとすれば、『これは、やめられない』という感じですね。」

## ●出合いを大切に

「なにしろ、僕は出合いをテーマに生きていますから」と大村さんはにこやかに笑って言いました。学校の先生、友人、同じ病気の人、エアロビックの競技者、講演会等で出会った人たち等、これまで多くの人との出会いに恵まれ、人との関わりが、病気への接し方、将来の目標、物事の考え方などに影響を受けてきたと考えています。

「人にはそれぞれ考え方があり、良い面も悪い面もあります。人と人が出会うことで、お互いに成長していくことができるはず。これからも出合いを大切にしていきたいです。」

そして、このことは人権尊重の社会に向けても大切なことだと大村さんは考えています。

「人権が尊重されるためには、偏見を無くしていくことが大事だと思います。偏見とは、実際にその人に会ったこともないのに、他人から聞いた情報だけで判断してしまうことで生じるものだと思います。病気に対しても偏見もありました。『あの人は病気だから』と遠ざかるのではなく、自分から積極的に関わっていくことで、正しいことが分かるし、いろんな物事を見ることで、考え方が変わってきます。そのためには、たくさんの人と直接顔を合わせて話すことが必要です。年齢や性別などは抜きにして、同じ人間として付き合うことが大事だと思います。」

最後に、今後の目標をお聞きしました。大村さんは、「世界大会での優勝です」と力強く答えてくれました。



(撮影：森脇宗一)

### 大村詠一(おおむらえいいち)さん

昭和61年、熊本県生まれ。4歳からエアロビクスをはじめ。小学2年生で1型糖尿病を発病。治療を続けながら、小学5年生の頃にエアロビック競技に移行し、数々の大会に出場。高校2~3年時に、世界選手権ジュニア部門で二連覇。兄妹で出場した一般トリオ部門において、スズキジャパンカップ2006優勝、スズキワールドカップ2007準優勝。熊本大学教育学部4年。今春から大学院に進学する。また、所属するエアロビックスタジオ「Team.OHMURA(チーム オオムラ)」では、自らの練習のかたわら小中学生への指導も行っている。

### ある日の出来事 ～「うわさ」って～

休日、私は弟とスーパーへ買い物に出かけた。その翌日、会社に行くと、「もうすぐ結婚?」「よかったね、おめでとう!」という声。「結婚って何!？」戸惑っている私に、先輩が言った。「ほら、昨日、スーパーで恋人と楽しそうに買い物してただろう?」私は慌てて「あれは弟よ。」と説明した。でも、うわさはどこまで広がっているんだろう…。思い込みでうわさをするのは、本当にやめてほしいわ。

その後、何気なく週刊誌をめくっていると、先日から話題になっている大きな事件の記事を見つけた。そこには、事件が起こった原因や被害者のことがおもしろおかしく書かれている。「これだって、本当のことじゃないかもしれないな…」。

私も今までうわさやゴシップ記事を楽しんでいたけど、こういうことが、いろんな人権問題を生んでいくことにもなるんじゃないかしら。



私たちの周りではその他、どのような人権問題があるのでしょうか。

### ⑥ 刑を終えて出所した人等の人権

刑を終えて出所した人やその家族に対しては、根強い差別意識があり、本人に更生の意欲があっても、就職や住居の確保の際に差別されるなど、現実には極めて厳しい状況です。刑を終えて出所した人等が社会の一員として生活できるためには、地域社会の理解と協力が不可欠です。



### ⑥ アイヌの人々の人権

北海道などに先住し、豊かで独自の伝統や文化を持つアイヌの人々は、明治以降の同化政策の中で、民族としての誇りを奪われることになりました。

今でも、アイヌの人々に対する理解が十分ではないため、差別されることがあります。アイヌの伝統等についての知識を持ち、民族や文化の違いに対する寛容さを育むことが必要です。

### ⑥ 性的指向に係る人権問題、性同一性障がい

同性愛などの「性的指向」や、体の性と心の性との食い違いにより社会的に支障をきたす「性同一性障がい」に対する偏見があります。性のあり方を固定的に判断し、少数派を特別視するのではなく、多様性を認める柔軟な考え方をもち、理解を深めていくことが必要です。

## ⑥ インターネットによる人権侵害

今、インターネット上での「プライバシーの暴露」や「差別表現の書き込み」など、人権を無視した行為が大きな問題となっています。インターネット上では、自分の顔や名前を知られずに発言できますが、何でも許されるものではありません。インターネット上でも、日常生活と同様、ルールやマナー、そして人権を守ることが必要です。



## ⑥ ホームレスの問題

様々な理由から、ホームレスになることを余儀なくされている人たちがいますが、その状況にかかわらず、見た目などで判断され、嫌がらせや暴行事件などがたびたび発生しています。その生活を営まざるを得なかった理由に目を向け、そして、その苦しみを理解し、自立に向けた支援を行うことが必要です。

## ⑥ 北朝鮮拉致問題に伴う人権問題

北朝鮮当局による日本人の拉致は国家による犯罪行為であり、重大な人権侵害です。平成16年7月までに一部の拉致被害者とその家族の帰国が実現しましたが、未だ、真相解明等に向けた交渉が続いており、一日も早い解決が求められています。また、平成18年6月に「拉致問題その他北朝鮮当局による人権侵害問題への対処に関する法律」が制定されました。

私たちは、この問題が人権侵害であるという認識を深めるとともに、直接関係のない在日朝鮮人の人々に対する嫌がらせなどの新たな人権侵害を起こさないようにする必要があります。

## ⑥ 水俣病をめぐる人権

水俣病は、工場排水中のメチル水銀に汚染された魚介類を、そうとは知らずに、たくさん食べたことが原因となって発生した病気です。昭和31年に水俣病が公式確認されて以来、半世紀が経過しましたが、多くの人が健康被害に苦しみ、これに加えて、地域の内外で、いわれの無い偏見や差別の問題が生じました。

### ① 集落内での差別

原因がまだはっきりしなかった頃、水俣病は伝染するという誤解による差別などを懸念して患者を家の中に隠しました。また、患者が出たとわかると、その家には人々が寄りつかなくなったり、様々ないやがらせをするなどのひどい差別がありました。

### ② 地域内での差別

原因企業であるチッソに大きく依存していた水俣ではチッソを擁護する人も多く、患者やその家族はチッソと対立する存在として差別や抑圧・忌避を受けるなど住民間の対立が深まり、地域の絆までこわれてしまいました。

### ③ 地域外からの差別

水俣出身であるために、結婚や就職を断られることもありました。また、水俣の産品が地域外では売れず、観光客も激減するなど、地域全体が、いわれの無い偏見や差別に苦しみました。



近年、対立していた住民等が一緒になって地域を再生していくために、人々の絆を取り戻す「もやい直し」が進んでいます。

私たちは、水俣病から得た多くの教訓をもとに、水俣病について正しい知識・認識を持ち、偏見や差別をなくしていくとともに人の命や健康、環境がいかに大切であることをあらためて認識しましょう。



# 鈴木ひとみさん「命をくれたキス」



平成19年12月8日、鶴屋ホール(熊本市)で、熊本県人権フェスティバルの一環として、鈴木ひとみさんの講演会を開催しました。その模様をお知らせします。

「私は23年間、車イスで生活をしています。」こう言って話を始められた鈴木さんは、20歳の頃、ミス・インターナショナルの準ミスに選ばれました。その後ファッションモデルとしての仕事をしていたある日、乗っていた車が交通事故に遭い、首の骨を折る大けがを負います。病院で手術を受けますが、車イスの生活になりました。

「一瞬の交通事故が残したものはあまりにも大きいものでした。モデルに戻れないことはもちろん、自分の将来が見えない状況でした。生きていても仕方ない、死のうと何度も思いました。」

そんな絶望の中で、後に夫となる婚約者が大きな支えとなってくれました。入院中、彼は手紙にこう書いたそうです。「とりあえず5年、いや3年、頑張ってみよう。それでも頑張れなかったら、その時は一緒に死ねばいい」。自分のために泣いてくれる人がいる、生きようと言ってくれる人がいる。これで「生きていける」と思うようになったと鈴木さんはその時の心情を語ってくださいました。

講演の中では、リハビリの辛い体験やその後の車イス陸上、射撃競技での活躍、そしてバリアフリーの考え方等について、自らの体験を基に、ユーモアを交えながら、分かりやすくお話いただきました。

そして、心に残る次のようなお話がありました。



鈴木ひとみさん

(エッセイスト、  
バリアフリーコンサルタント)

ミス・インターナショナル準日本代表に選ばれるなど、ファッションモデルやテレビ・CMでも活躍が期待される中、交通事故で頸椎を骨折。2年間の入院生活を経て、苦難の日々から立ち直っていくまでの壮絶な体験は、多くの人に勇気と感動を与えている。

## 幸せとは何か

「みなさんは幸せってどういうことだと思われませんか。目標を達成したら幸せでしょうか。でもそんな幸せは長続きしません。幸せというのは気付くことです。」

「目が見える”、”耳が聞こえる”、”話せる”、”歩くことができる”、”考えることができる”。そして”家族がいる”、”友達がいる”。この当たり前前のことがどれだけありがたいことか、それに気付くことができる人に、幸せは長続きするのだと思います。」

私は足も手も不自由です。でも、その不自由を嘆くのではなく、リハビリし、克服し、道具を使い、そのことで自由を手に入れました。そこに幸せを感じています。」

「時々、『なぜ、自分は存在するのだろうか?』と考えます。でも、誰もみんな、偶然に存在しているのではないと思います。自分の存在を認めてくれる人たちがいるのです。つまり、存在することに意味があるのです。」

## 積極的に生きる

「この世の中には、障がい者と健常者というグループがあるのではありません。障がいがあっても、無くても、みんな、ある部分では優れていても、ある部分では劣っているものです。だから、健常者と障がい者の線引きはできないし、する必要もありません。健常者とは「健康が常な者」と書きますが、そんな人はいるのでしょうか？」

体が不自由になることによって、元のような生き方はできないかもしれません。でも、残された体の機能によって、今までとは違った生き方ができる可能性があります。今の状態でいかに人生を有意義に暮らせるかを考えるべきではないでしょうか。決して、他人と比べるものでもなく、昔の自分と比べるものでもないと思います。」

人間の心は、障がい者になったことで、一生浮かび上がれないものではないと思います。むしろ、以前よりも成長した生き方ができるのだと思います。」

私の場合、自分が障がい者となって、よりいっそう生きる機会を余分に与えられました。ケガをする前より後の人生のほうが長くなりつつありますが、いつも堂々と、積極的に生きていきたいです。」

前向きに、積極的に生きる鈴木さんの姿勢、そして言葉に、参加した方からは、「生きるとはどういうことなのか、考えさせられた」、「“当たり前”を“幸せ”に思える人でありたいと痛感した」などの感想が寄せられました。



# 「人権メッセージ」の紹介



今年も「人権メッセージ『あなたのひとこと』」を募集しましたところ、県民の皆さんから多くのご応募をいただきました。大変ありがとうございました。(応募総数3,496点)

これらの作品は、他人への感謝や思いやりの言葉、励まし、命の大切さや個性の尊重を訴える言葉など、人権の大切さを考える上で大切なメッセージが込められているものでした。

熊本県では、応募作品の中から20作品を選び、今後の人権啓発に活用させていただく予定です。今回は、このうち10作品をご紹介します。

“お先にどうぞ”  
“ありがとう”  
心のキャッチボールに  
喜びの種が  
かくれんぼ

「自分にはできないなあ」  
とか思っていない?  
大丈夫。  
君にしか出来ない事は  
たくさんあるんだから。

私とあなた  
顔が違う 性格が違う  
趣味も違う  
でも、お互いを大切に思う心は  
同じだったらいいな。

気づいたら  
その時つみとる  
差別の芽

気づいてますか? 『子供の気持ち。』  
聞こえていますか? 『心の声。』  
見のがさなくて、『小さなSOS』

ありがとうという言葉  
言われた人はうれしくて、  
言った人は気持ちいいよね!  
ありがとうってまほうの言葉!

その笑顔が  
誰かを幸せにする。  
私もそんな人になりたいな。

人というのは不思議なもので  
いつも周りで見比べてる。  
皆と同じだと安心する。  
別にその枠から出ても  
怖くないのに。

あせらなくていい。  
自分のペースで進めばいい。  
それが君の人生なんだから。

「ごめんなさい」  
その一言が言えなかつただけなのに、  
そんな自分が なぜかくやしい。



# 人権センターからのお知らせ



あたらしい人権啓発資料ができました

## 人権啓発冊子 「くらしと人権」

同和問題をはじめ、女性、子ども、高齢者の人権等のそれぞれの人権課題について、イラストを交えながら簡潔に解説した啓発冊子です。

それぞれのテーマごとに、はじめに日常生活を舞台にした短い物語を掲載し、人権問題をより身近に感じることのできるものとなっています。

(A5判・カラー・28頁)



## 人権啓発プレス THEハート No.10 「私にもできる、少しのこと ～人権尊重社会に向けて～」

人権啓発プレスシリーズの第10作です。

社会に存在する人権の問題について、【街の中】、【会社】そして【インターネット】を舞台に、分かりやすく解説しながら、人権尊重の社会づくりに必要な一人ひとりのちょっとした行動の必要性を読者に訴えかけていく内容です。

(A4判・カラー・8頁)



※詳しくは、人権センターまでお問い合わせください。

### 熊本県は部落差別につながる身元調査を、条例で禁止しています。

「熊本県部落差別事象の発生の防止及び調査の規制に関する条例」では、結婚や就職の際に、結婚相手や就職希望者など特定の個人やその親族がどこに住んでいるのか、または住んでいたのかについて、調査をしたり、調査を引き受けたりすることを禁じています。

**熊本県人権センター** 〒862-8570 熊本市水前寺6丁目18番1号(熊本県庁行政棟新館2階)

開館時間 8:30～17:30 休館日 土曜・日曜・祝日・年末年始

電話(直通) 096-333-2299 / 333-2300

電話(相談専用) 096-384-5822 (9:00～12:00、13:00～16:00)

ファクシミリ 096-383-1206

ホームページ <http://www.pref.kumamoto.jp/kan/jinkencenter>

電子メール [jinkencenter@pref.kumamoto.lg.jp](mailto:jinkencenter@pref.kumamoto.lg.jp)

19 環 人権セ

③ 001-3